

児童における関係性攻撃の認識についての研究

筑波大学大学院人間総合科学研究科 関 口 雄 一

Children's knowledge of relational aggression

Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba SEKIGUCHI, Yuichi

要 約

本研究は、児童が実際に保持している関係性攻撃についての知識である関係性攻撃観の構造を明らかにすること、ならびに関係性攻撃観と仲間関係の関連を検討することを目的とし、小学5、6年生児童388名に対して関係性攻撃観尺度、小学生用P-R攻撃性質問紙、Q-Uを含む質問紙調査を実施した。先行研究の知見より関係性攻撃観は「命令的規範」、「記述的規範」、「期待」、「秘匿可能性」の4因子構造であるとの仮説を検証するために、確認的因子分析を実施し、モデルの適合度を検討した。また、階層的重回帰分析の結果、仲間からの「承認」と関係性攻撃観の「秘匿可能性」交互作用が関係性攻撃に有意に関連することが示された。以上の結果から、仲間から受け入れられていると感じ、かつ「秘匿可能性」が高い児童が最も関係性攻撃得点が高いことが示された。

【キー・ワード】 関係性攻撃, 児童, 社会的情報処理, 仲間からの承認

Abstract

The purpose of the present study was to reveal structure of the knowledge of relational aggression that children are actually holding and to study the relation among the knowledge of relational aggression and friendship. The participants (388 fifth- and sixth-grade children) completed a questionnaire that included knowledge of relational aggression scales, the proactive and reactive aggression questionnaire for elementary school children, the Q-U scales. Confirmatory factor analysis examined the goodness-of-fit for four factor model of the knowledge of relational aggression, in which the factors were injunctive norm, descriptive norm, expectations, and stealth. Hierarchical multi regression analysis showed that interaction of peer acceptance and stealth was significantly related to relational aggression. These results supported previous studies which stated relational aggression was related to highly status in peer groups.

【Key words】 Relational aggression, Children, Social information processing, Peer acceptance

問題と目的

関係性攻撃 (relational aggression) とは、「意図的な操作や仲間関係にダメージを与えることによって、他者を傷つける行動」と定義されている攻撃行動である (Crick & Grotpeter, 1995)。具体的には、無視、仲間外れ、悪意のある噂などを含む攻撃行動で、身体への暴力や直接的な暴言からなる外顕的攻撃 (overt aggression) とは異なる攻撃形態である。かねてより、攻撃行動への従事は、心理社会的不適応と関連することが示されてきたが (Dodge, Coie, Pettit, & Price, 1990)、関係性攻撃についても同様に、児童期において、心理社会的不適応の関連が示されている (Crick & Grotpeter, 1995)。さらに、研究数は少ないが、縦断的研究の知見から、小学 3 年生時の関係性攻撃の高さが、1 年後の引っ込み思案、身体的愁訴、非行を予測することが示されている (Crick, Ostrov, & Werner, 2006)。この様に、関係性攻撃は児童・生徒の心理社会的適応と密接にかかわっており、その予防や介入が必要とされる問題行動である。

しかし、従来のソシオメトリック法での「『好き - 嫌い』という仲間内地位の評価 (sociometric popularity)」ではなく、「仲間内での知名度や人気、魅力による評価 (perceived popularity)」を行った場合、仲間内での高地位が関係性攻撃と関連することが示されている (Cillessen & Mayeux, 2004; Rose, Swenson, & Waller, 2004)。この関連は関係性攻撃のみにみられ、外顕的攻撃と人気に有意な関連は示されていない (Rose, et al., 2004)。さらに従来のソシオメトリック法で測定された仲間から好かれている程度は、関係性攻撃と負の関連にあることも示されている (Cillessen & Mayeux, 2004)。つまり、関係性攻撃児は、仲間から好かれてはいないのかもしれないが、仲間集団内で中心的立場であったり、目立つ存在であったり、魅力的であることが考えられる。こうした関係性攻撃児の仲間関係は、関係性攻撃という攻撃形態の特徴によるものと考えられる。例えば、関係性攻撃の具体的な形態である「友人関係の撤去をほのめかすことによる脅迫」や「社会的排除」は、関係性攻撃児が自分の地位や知名度を高める様に、仲間集団をひっそりと再構成することを可能にしていると考えられている (Rose, et al., 2004)。これらの知見から、関係性攻撃児の中に、仲間集団内の高い地位から恩恵を享受している者が存在する可能性が指摘されている (Werner & Hill, 2010)。さらに、そうした高地位の関係性攻撃児は、関係性攻撃による成功体験により、関係性攻撃は有効な問題解決方略だという認識を持っている可能性も示唆されている (Cillessen & Mayeux, 2007)。つまり、仲間から受け入れられていると認知していて、かつ関係性攻撃が便利な問題解決方略であると思っている児童は、関係性攻撃の遂行に対して許容的になることが推察されるのである。そのため、児童が保持している関係性攻撃に関する知識を明らかにする必要があると考えられる。

208 名の小学 5, 6 年生児童を対象に、児童が実際に抱いている関係性攻撃についての知識を文章完成法によって収集した関口 (2011) では、得られた記述は「規範」、「効力感」、「期待」、「特徴」の 4 つの大きなカテゴリにほぼ分類されることが示された。そしてその後、Crick & Dodge (1994) の社会的情報処理 (social information processing model; SIP) モデルや、Cialdini, Kallgren, & Reno (1990) の規範的信念 (normative beliefs) に関する先行研究を参考に、関係性攻撃に関する知識の内容についてさらに整理した。まず、「特徴」に分類されていた「頻度」や「普及」に関する項目を

大半の人々がとる行動の標準に関する知識である「記述的規範 (descriptive norm)」として再分類し、行為に対する一般的な攻許容性と、報復の許容性を示す項目からなっていた「規範」の名称も「命令的規範 (injunctive norm)」に変更した。そして、「特徴」は関係性攻撃の特有の性質である「秘匿可能性」のみとした。さらに、「効力感」は SIP モデルでのオンライン情報処理ステップで機能するものと考え、状況を超えた一般化された認知からなる知識構造とは次元が異なるため、知識構造の一部としては扱わないこととした。よって、本研究で扱う関係性攻撃の知識は、「命令的規範」、「記述的規範」、「期待」、「秘匿可能性」を内容として含むと考えられ、以上の再分類した項目を表 1 に示す。そして、本研究では関係性攻撃についての知識を「関係性攻撃観 (knowledge of relational aggression)」と呼び、その定義を、「過去の経験から形成された、関係性攻撃に対する個人の規範や期待、特徴に関する知識」とした。

表 1 関係性攻撃観の概念整理

カテゴリ		項目例	
A 命令的 規範	A1	否定	よくないと思う
	A2	正当化	きれいな人にするのはしかたがないと思う
	A3	肯定	それほど悪いことではないと思う
	A4	遂行者否定	する人はとても悪い人だと思う
	A5	有害性	された人につらい思いをさせることだと思う
B 記述的 規範	B1	頻度	よくあることだと思う
	B2	普及	誰でもやっていることだと思う
C 期待	C1	肯定的結果予期	相手に思い知らせてやれると思う
	C2	事態悪化	けんかやいじめにつながると思う
	C3	自分の気分悪化	後できっと後悔すると思う
	C4	否定的結果予期	した人は仲間をなくすと思う
D 秘匿可能性	秘匿可能性	自分がやったと気づかれないうすむと思う	

以上の議論を踏まえ、本研究では、児童が実際に保持している関係性攻撃に対する一般的な知識を明らかにすることを第一の目的とし、次いでその関係性攻撃についての知識と仲間関係との関連を検討することを第二の目的とする。

方 法

調査対象者 千葉県内の 2 校の公立小学校に通う小学 5, 6 年生 388 名。そのうち回答に不備のあった児童 45 名を除いた児童 343 名 (5 年生男子 115 名, 5 年生女子 93 名, 6 年生男子 65 名, 6 年生女子 70 名) を分析の対象者とした。

調査内容 (1)関係性攻撃観項目: 関口 (2011) で得られた児童の関係性攻撃に対するイメージの記

述を参考に、関係性攻撃観を網羅的に捉える 50 項目を作成した。また、質問紙の性質上、回答者に関係性攻撃の定義を提示する必要があったため、関係性攻撃の最も代表的な 3 つの攻撃形態である『「無視」、「仲間外れ」、「かげ口」をぜんぶ合わせて「(仲間を) ひとりぼっちにする攻撃」と呼ぶことにします』と教示した。そして各項目の先頭に「ひとりぼっちにする攻撃は (を)」というリード文を表記した。質問紙の回答に当たっては、『この質問は、「無視・仲間はずれ・かげ口」といった、「(仲間を) ひとりぼっちにする攻撃」について、いつもあなたが考えていることをきくものです。ふだんの自分が考えていることを思いうかべて、次の質問について「1: まったくそう思わない～4: とてもそう思う」の中で、一番あてはまると思うものに○をつけてください』と教示し、4 件法で回答を求めた。

(2) 小学生用 P-R 攻撃性質問紙: 児童の攻撃性を測定する目的のために、坂井・山崎 (2004) が作成した「小学生用 P-R 攻撃性質問紙」を用いた。回答者の負担を軽減するため、「表出性攻撃」と「関係性攻撃」に該当する項目のみ合計 14 項目を用いた。各質問項目について自分がどの程度あてはまるかを、「まったくあてはまらない…1, あまりあてはまらない…2, よくあてはまる…3, とてもよくあてはまる…4」の 4 件法で回答を求めた。

(3) Q-U「学級満足度尺度」承認項目: この質問項目は、「学級満足度尺度」(河村・田上, 1997) 内の承認得点を算出する項目である。「学級満足度尺度」は、承認 6 項目と被侵害 6 項目の計 12 項目からなる。本研究においては、「承認」の 6 項目のみを採用し、どの程度児童が学級内で仲間から受容されていると感じているのかを測定する目的で使用した。「自分の気持ちに一番近い数字に○をつけてください。」という教示に基づいて、「まったくない, まったく思わない, まったくない…1, 「あまりない, あまりそう思わない, あまりいない…2」, 「少しある, 少しそう思う, 少しいる…3」, 「よくある, とてもそう思う, たくさんいる…4」の 4 件法で回答を求めた。

手続き 調査協力の得られた各学級において、ホームルームや授業時間の一部を割いて、担任教員による一斉配布形式で実施された。配布時に、調査への協力は自由であることや、調査はテストではなく、学校の成績に一切関係しないこと等の質問紙に記載してある注意事項を、教員に述べてもらった。質問紙へ記入し、児童本人が質問紙を封筒に封入した後に担任教員が回収を行った。また校長から同意書に署名と押印をもらった。

本研究は筆者の所属機関における研究倫理委員会の承認を得て行われた。

調査時期 2010 年 10 月—12 月

結 果

関係性攻撃観の因子構造の確認

先行研究の知見より、関係性攻撃観の構成概念として、「命令的規範」、「記述的規範」、「期待」、「秘匿可能性」の 4 因子が想定された。そこで、この分類による因子構造の適合度を検討するため、4 つの潜在因子から各因子に該当する項目がそれぞれ影響を受けるモデルを想定し、潜在因子間には全て共分散が存在すること、誤差項には相関が存在しないことを仮定した確認的因子分析を行った。分析

には SPSS 社製 AMOS17.0 を使用し、パラメータの推定には最尤法を用いた。分析の結果、モデルの適合度は、 $\chi^2(224)=444.29, p<.001, GFI=.89, AGFI=.86, CFI=.84, RSMEA=.056$ であり、基準にやや満たないものであったが、許容できる範囲内と解釈され、仮説通りの因子構造が確認された。このモデルの適合度指標と標準化係数、因子間相関を表 2 に示す。

表 2 関係性攻撃観についての確認的因子分析の結果

[適合度指標]	χ^2 (自由度)	有意確率	GFI	AGFI	CFI	RMSEA
	444.29(224)	.000	.888	.862	.841	.056
[標準化係数]						有意確率
16A1 ひどいことだと思う(否定)		.62				.000
20A1 自分もされたいやだと思う(否定)		.58				.000
01A1 よくないと思う(否定)		.58				.000
17A5 された人につらい思いをさせることだと思う(有害性)		.50				.000
02A3 それほど悪いことではないと思う(肯定)		-.46				.000
09A5 された人が学校に来たくなると思う(有害性)		.45				.000
08A2 きらいな人にするのはしかたがないと思う(正当化)		-.43				.000
18A4 する人はとても悪い人だと思う(遂行者否定)		.39				.000
10B1 ふつうにあることだと思う(頻度)		.75				.000
11B2 誰でもやっていることだと思う(普及)		.69				.000
03B2 よくあることだと思う(頻度)		.51				.000
06B2 大人もすることだと思う(普及)		.38				.000
22C4 すると、した人は仲間をなくすと思う(否定的結果予期)		-.58				.000
05C3 すると、後できっと後悔すると思う(自分の気分悪化)		-.57				.000
14C3 すると、自分もいやな気持ちになると思う(自分の気分悪化)		-.52				.000
15C4 すると、した人の信頼がなくなると思う(否定的結果予期)		-.52				.000
19C3 すると、した人もつまらなくなると思う(自分の気分悪化)		-.43				.000
13C1 することで、相手に思い知らせてやれると思う(肯定的結果予期)		.36				.000
04C2 すると、けんかやいじめにつながると思う(事態悪化)		-.30				.000
21D1 こっそりやるので、秘密にできると思う(秘匿可能性)		.62				.000
12D1 自分がやったと気づかれないですむと思う(秘匿可能性)		.54				.000
07D1 ごまかせると思う(秘匿可能性)		.47				.000
[因子間相関]			F1	F2	F3	F4
	F1:命令的規範	.		-.54	-.82	-.51
	F2:記述的規範		.		.52	.64
	F3:期待			.		.54
	F4:秘匿可能性				.	.

注1)傍線の囲み内における数値は潜在変数「命令的規範」の標準化係数

注2)細かい点線の囲み内における数値は潜在変数「記述的規範」の標準化係数

注3)一点鎖線の囲み内における数値は潜在変数「期待」の標準化係数

注4)二重線の囲み内における数値は潜在変数「秘匿可能性」の標準化係数

「命令的規範」は、関係性攻撃という行為に対する一般的な許容性と、攻撃的反応、つまり報復の許容性を示す因子であり、項目例としては「きれいな人にするのはしかたがないと思う」、「それほど悪いことではないと思う」などが挙げられる。「記述的規範」は、大半の人々がとる行動の標準、つまり、攻撃行動の生起頻度に関する知識を示す因子である。項目例として、「誰でもやっていることだと思う」、「よくあることだと思う」などが挙げられる。続いて、「期待」は関係性攻撃によりもたらされる事態についての一般的な知識を示す因子であり、「やり返されると思う」、「あとで後悔すると思う」などの項目からなる。最後に「秘匿可能性」は、関係性攻撃の特徴である行為の不可視性に関する知識を示す因子であり、「気づかれないですむと思う」、「周りの人が気づきにくいものだと思う」などの項目により構成された。これら 4 因子間の相関をみると、「記述的規範」と「期待」、「秘匿可能性」はそれぞれと正の相関を示しており、「命令的規範」が他 3 因子と負の相関を示していた。

確認された 4 因子それぞれの内的整合性を確認するために、クロンバックの α 係数を算出したところ、「命令的規範」において 9 項目で $\alpha=.74$ 、「記述的規範」において 4 項目で $\alpha=.65$ 、「期待」において 7 項目で $\alpha=.67$ 、「秘匿可能性」において 3 項目で $\alpha=.55$ の値が示された。そして、各因子に該当する項目の得点を加算平均し、尺度得点とした。この結果を表 3 に示す。

表 3 各尺度得点の記述統計量

尺度名	n	項目数	得点		分布		理論的中間点	α 係数
			平均値(標準偏差)	歪度	尖度			
命令的規範	343	9	3.63 (0.37)	-1.61	3.28	2.5	.74	
記述的規範	343	4	2.08 (0.66)	.31	-.53	2.5	.65	
期待	343	7	1.65 (0.46)	.84	.98	2.5	.67	
秘匿可能性	343	3	1.76 (0.65)	.77	.20	2.5	.55	
承認	343	6	3.09 (0.60)	-.97	.93	2.5	.80	
表出性攻撃	343	7	2.17 (0.66)	.28	-.40	2.5	.84	
関係性攻撃	343	7	1.78 (0.55)	.80	.67	2.5	.81	

各尺度得点の性差・学年差の検討

各尺度得点について性別(2)×学年(2)の 2 要因分散分析を行った。関係性攻撃観の下位尺度得点では、「記述的規範」得点に有意な学年の主効果 ($F_{(1,339)}=10.64, p<.001$) がみられたのみで、6 年生の方が 5 年生よりも有意に高い得点だった。

また、「表出性攻撃」得点では、性別の主効果が有意で ($F_{(1,339)}=20.43, p<.001$)、男子の方が女子よりも有意に高い得点を示した。さらに、学年の主効果も有意であり ($F_{(1,339)}=5.33, p<.05$)、6 年生の方が 5 年生よりも有意に高い得点を示した。そして、「関係性攻撃」得点については、性別の主効果が有意で ($F_{(1,339)}=8.29, p<.01$)、男子の方が女子よりも有意に高い得点を示した。また学年の主効果も有意であり ($F_{(1,339)}=21.47, p<.001$)、6 年生の方が 5 年生よりも有意に高い得点を示した。以上の分散分析の結果を表 4 に示す。

表4 性別(2) × 学年(2) の2要因分散分析の結果

従属変数	性別	5年生(208名)	6年生(135名)	主効果(F値)		交互作用
				性別	学年	
命令的規範	男子(180名)	3.61 (0.39)	3.58 (0.39)	2.76 ⁺	n.s.	n.s.
	女子(163名)	3.70 (0.31)	3.62 (0.38)			
記述的規範	男子(180名)	2.01 (0.60)	2.22 (0.69)	n.s.	10.64 ^{***}	n.s.
	女子(163名)	1.96 (0.67)	2.21 (0.65)			
期待	男子(180名)	1.66 (0.43)	1.72 (0.46)	n.s.	3.43 ⁺	n.s.
	女子(163名)	1.55 (0.38)	1.67 (0.55)			
秘匿可能性	男子(180名)	1.85 (0.73)	1.77 (0.69)	n.s.	n.s.	n.s.
	女子(163名)	1.70 (0.58)	1.70 (0.56)			
承認	男子(180名)	3.06 (0.61)	2.98 (0.68)	3.11 ⁺	n.s.	n.s.
	女子(163名)	3.17 (0.59)	3.11 (0.51)			
表出性攻撃	男子(180名)	2.29 (0.67)	2.38 (0.66)	20.43 ^{***}	5.33 ⁺	n.s.
	女子(163名)	1.89 (0.60)	2.13 (0.61)			
関係性攻撃	男子(180名)	1.78 (0.50)	2.00 (0.62)	8.29 ^{**}	21.47 ^{***}	n.s.
	女子(163名)	1.56 (0.47)	1.88 (0.54)			

注) ⁺p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

各尺度得点の相関係数の検討

関係性攻撃観の各下位尺度と「承認」、2種類の攻撃性の関連を検討するために、各下位尺度得点間の相関係数を算出した。その際、各尺度得点にみられた有意な学年差・性差を考慮して、学年別と男女別に相関係数を算出した。その結果を表5と表6に示す。なお、非常に多くの変数間に有意な結果が示されたため、以下には「承認」と「関係性攻撃」を中心に報告する。

表5 各尺度得点間の相関係数(男女別)

	1	2	3	4	5	6	7
1.命令的規範	・	-.42 ^{***}	-.66 ^{***}	-.35 ^{***}	.13 ⁺	-.36 ^{***}	-.44 ^{***}
2.記述的規範	-.37 ^{***}	・	.48 ^{***}	.36 ^{***}	-.17 ⁺	.45 ^{***}	.46 ^{***}
3.期待	-.53 ^{***}	.29 ^{***}	・	.39 ^{***}	-.19 ⁺	.40 ^{***}	.42 ^{***}
4.秘匿可能性	-.37 ^{***}	.41 ^{***}	.27 ^{***}	・	-.08	.25 ^{***}	.38 ^{***}
5.承認	.18 ⁺	-.17 ⁺	-.16 ⁺	-.11	・	-.16 ⁺	-.10
6.表出性攻撃	-.26 ^{***}	.27 ^{***}	.28 ^{***}	.14 ⁺	-.11	・	.59 ^{***}
7.関係性攻撃	-.36 ^{***}	.26 ^{***}	.32 ^{***}	.27 ^{***}	-.10	.50 ^{***}	・

注1) ⁺p<.10, *p<.05, ***p<.001

注2)男子(N=180)左下, 女子(N=163)右上

表6 各尺度得点間の相関係数(学年別)

	1	2	3	4	5	6	7
1.命令的規範	・	-.49 ^{***}	-.61 ^{***}	-.38 ^{***}	.06	-.32 ^{***}	-.41 ^{***}
2.記述的規範	-.31 ^{***}	・	.50 ^{***}	.49 ^{***}	-.22 [*]	.47 ^{***}	.37 ^{***}
3.期待	-.57 ^{***}	.27 ^{***}	・	.45 ^{***}	-.20 [*]	.37 ^{***}	.34 ^{***}
4.秘匿可能性	-.36 ^{***}	.34 ^{***}	.24 ^{***}	・	-.10	.37 ^{***}	.37 ^{***}
5.承認	.24 ^{***}	-.13 ⁺	-.16 [*]	-.11	・	-.30 ^{***}	-.04
6.表出性攻撃	-.30 ^{***}	.24 ^{***}	.31 ^{***}	.12 ⁺	-.05	・	.53 ^{***}
7.関係性攻撃	-.39 ^{***}	.29 ^{***}	.39 ^{***}	.33 ^{***}	-.15 [*]	.56 ^{***}	・

注1)⁺ $p < .10$, ^{*} $p < .05$, ^{**} $p < .01$, ^{***} $p < .001$

注2)5年生(N=208)左下, 6年生(N=135)右上

まず、「承認」の結果について報告する。「承認」得点は性別、学年にかかわらず、関係性攻撃観や攻撃性と有意な関連を示しても、相関係数の値が小さく($r = -.11 \sim .30$)、低い関連しか示されなかった。その中で、女子において「表出性攻撃」と有意な負の相関を示したのに対し($r = -.16, p < .05$)、男子においては有意な関連が示されないという違いもみられた。同様に、5年生では「表出性攻撃」と有意な関連を示さなかったが、6年生では有意な負の相関を示した($r = -.30, p < .001$)。また、5年生では「関係性攻撃」と有意な負の相関を示したが($r = -.15, p < .05$)、6年生では有意な相関は示されなかった。

次に「関係性攻撃」について報告する。学年、性別にかかわらず、「関係性攻撃」は「表出性攻撃」と中程度の正の相関を示し($r = .50 \sim .59, p < .001$)、関係性攻撃観の各下位尺度と有意な相関を示していた。具体的には、「記述的規範」、「期待」「秘匿可能性」とは正の相関を示し、「命令的規範」とは負の相関を示していた。

攻撃性に対する関係性攻撃観と仲間からの承認の関連の検討

関係性攻撃観の各下位尺度得点と仲間からの「承認」得点の交互作用が、攻撃性と関連するかどうかを検証するために、「関係性攻撃」を従属変数とする階層的重回帰分析を実施した。まず、各下位尺度得点に性差、学年差がみられたこと、および「関係性攻撃」と「表出性攻撃」の高い相関($r = .52 \sim .58, p < .001$)を考慮して、第1ステップで性別と学年のダミー変数と、「表出性攻撃」得点が統制変数として回帰式に投入された。次に、第2ステップでは主効果の検討として、「承認」得点と関係性攻撃観の各下位尺度得点が回帰式に投入された。これにより、「表出性攻撃」を取り除いた「関係性攻撃」と、「承認」ならびに関係性攻撃観の関連が検討できると考えられた。続いて、第3ステップで主効果の各変数と性別・学年の交互作用項(両者の変数を中心化した後に掛け合せたもの)、ならびに「承認」と関係性攻撃観の交互作用項が投入された。以上の分析を行うことで、「承認」、関係性攻撃観、各交互作用項が、性別と学年、「表出性攻撃」を調整した後の攻撃性の得点とどの程度の関連があるのか検討することができる。その結果を表7に示す。

表 7 関係性攻撃についての階層的重回帰分析の結果

	Step 1		Step 2		Step 3	
	β	t	β	t	β	t
性別	-.03	-0.64	-.02	-0.52	-.02	-0.56
学年	.18	3.98 ***	.17	4.04 ***	.17	4.09 ***
表出性攻撃	.53	11.53 ***	.42	8.91 ***	.43	9.15 ***
承認			.02	0.55	-.03	-0.52
命令的規範			-.15	-2.77 **	-.14	-2.55 *
記述的規範			.04	0.70	.04	0.87
期待			.06	1.21	.08	1.56
秘匿可能性			.16	3.34 ***	.18	3.75 ***
承認×学年					.11	2.12 *
承認×秘匿可能性					.11	2.58 **
R^2		.34		.42		.44
ΔR^2		.34 ***		.08 ***		.02 *

注1) * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

注2) $N=343$

階層的重回帰分析の結果、まず、第1ステップにおいて、性別と学年のダミー変数および「表出性攻撃」投入後の R^2 の変化量は有意($F_{(3, 339)}=57.85, p<.001$)であった。そして、「学年」($\beta=.18, p<.001$)と「表出性攻撃」($\beta=.53, p<.001$)が「関係性攻撃」に対して有意な関連を示した。次に、第2ステップにおける「承認」得点と関係性攻撃観の下位尺度得点を投入後の R^2 の変化量は有意($F_{(8, 334)}=30.51, p<.001$)であった。そして、「命令的規範」($\beta=-.15, p<.01$)と「秘匿可能性」($\beta=.16, p<.001$)が「関係性攻撃」に対して有意な関連を示していた。また、第3ステップにおいて交互作用項を投入すると、 R^2 の変化量が有意に上昇した($F_{(10, 332)}=26.23, p<.001$)。そして、「命令的規範」($\beta=-.14, p<.05$)、「秘匿可能性」($\beta=.18, p<.001$)の有意な関連はそのままに、「承認」と学年の交互作用項($\beta=.11, p<.05$)と「承認」と「秘匿可能性」の交互作用項($\beta=.11, p<.01$)がそれぞれ有意な関連を示した。そこで、有意な交互作用項の内容を調べるために、Cohen, Cohen, West, & Aiken (2003)の手続きを踏まえ、「関係性攻撃」を目的変数とする回帰方程式に、「承認」と「秘匿可能性」の平均得点±1標準偏差の値がそれぞれ代入された。この結果を図1~2に示す。縦軸は、回帰式により得られた予測値から「関係性攻撃」得点を統制した残差得点を示している。図1に示されている様に、6年生で仲間からの「承認」を高く感じている児童は、「関係性攻撃」の得点が最も高くなることが明らかになった。そして図2で示されるように、「秘匿可能性」と「承認」の両者の得点が高い児童は、最も「関係性攻撃」得点が高くなることが示された。

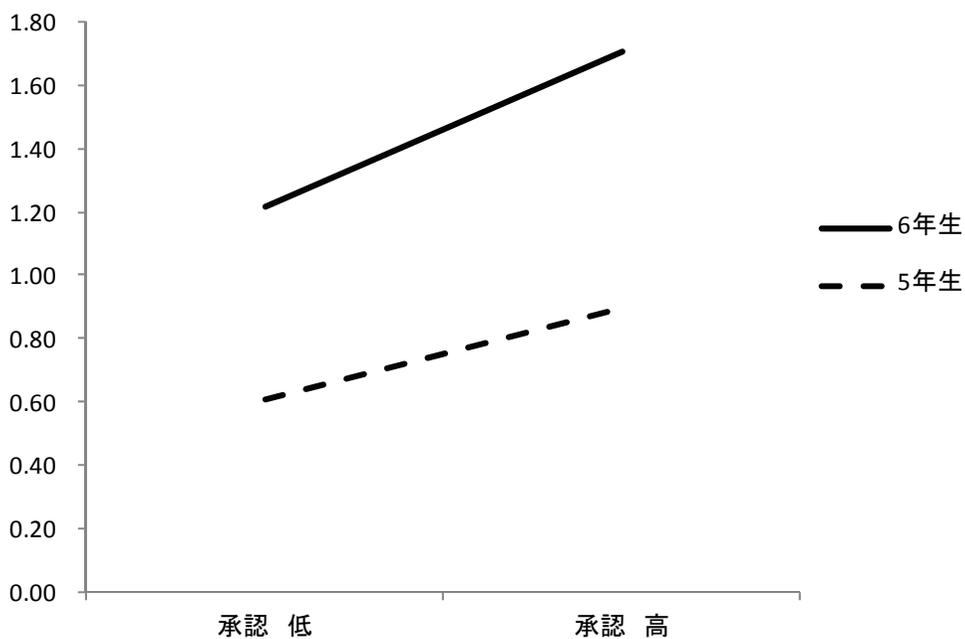


図1 「承認」得点の高低と学年による「関係性攻撃」得点の変化

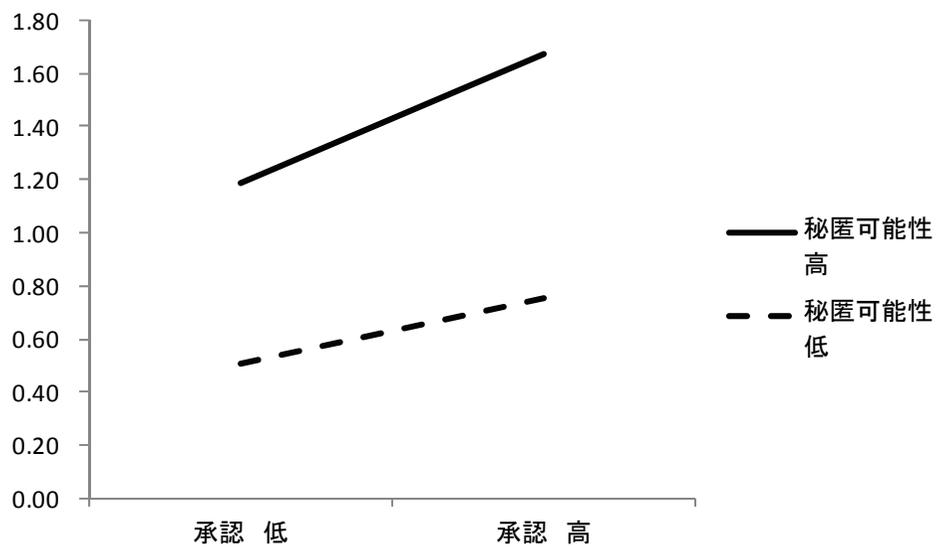


図2 「承認」得点と「秘匿可能性」得点の高低による「関係性攻撃」得点の変化

考 察

関係性攻撃観の因子構造

児童が実際に保持している関係性攻撃観の構造を明らかにすることが、本研究の第一の目的であった。先行研究の知見を基にした因子構造についての確認的因子分析により、関係性攻撃観の4因子構造の適合度が検討された。分析の結果、適合度指標は基準値に若干及ばないものの、許容できる範囲内に収まっているように考えられた。しかし、内的一貫性の検討のため、各因子に該当する項目のクロンバックの α 係数を算出したところ、「記述的規範」と「期待」、「秘匿可能性」において、基準よりも低い値が算出され、十分な信頼性が示されなかった。この結果から、関係性攻撃観の構造として、先行研究に基づいた因子構造をそのまま適用することは困難に考えられた。よって、今後は、全項目を用いた調査データによる探索的因子分析の実施が求められると考えられる。

関係性攻撃観と仲間からの承認の関連について

関係性攻撃観と仲間関係について検討することが本研究の第二の目的であった。「関係性攻撃」を従属変数とした階層的重回帰分析の結果、「承認」と学年の交互作用項と、「承認」と「秘匿可能性」の交互作用項が、「関係性攻撃」と有意に関連することが示された。その結果、「秘匿可能性」が高く、仲間からの「承認」も高く感じている児童は、「関係性攻撃」の得点が最も高くなることと、6年生で「承認」が高い者が「関係性攻撃」得点が最も高くなることが明らかにされた。これらの結果から、単純な相互相関の検討では示されなかった「承認」と「関係性攻撃」の関連が示され、関係性攻撃は学年が上がるにつれて、仲間からの人気と正の関連を強めていくという先行研究の知見(Cillessen & Mayeux, 2004)に一致する結果が得られたと考えられた。さらに、「承認」と「秘匿可能性」の有意な交互作用項がみられた結果は、先行研究で指摘された、「関係性攻撃児の中には、仲間集団内の高い地位から恩恵を享受している者が存在する可能性がある(Werner & Hill, 2010)」、「関係性攻撃による成功体験により、関係性攻撃を有効な問題解決方略だという認識を持っている可能性がある(Cillessen & Mayeux, 2007)」という問題点を証明したと考えられる。しかし、本研究の結果は、信頼性の低い関係性攻撃観の各下位尺度得点を用いたものであり、慎重な解釈が求められる。

本研究の理論的位置づけと臨床実践への示唆

本研究で作成した関係性攻撃観尺度は、先行研究と児童や教員から集めた項目をもとに作成されており、十分な内容的妥当性があると考えられる。その中でも、関係性攻撃の独自の特徴である「秘匿可能性」を尺度項目に含むことができたため、先行研究では検討されてこなかった関係性攻撃の独自の特徴を扱える測度として非常に価値の高いものであると考えられる。実際に、「秘匿可能性」が「表出性攻撃」を統制した純粋な「関係性攻撃」との関連を示したことで、本尺度の有用性が示されたと考えられる。しかし、本研究の結果から、関係性攻撃観尺度の信頼性、妥当性の検討は不十分であり、今後は関係性攻撃観尺度の完成が求められるだろう。

本研究における臨床実践への示唆として、関係性攻撃観が潜在的な関係性攻撃児の把握に有益な可能性があることが挙げられる。階層的重回帰分析の結果から、仲間から受け入れられていると感じている児童や、「秘匿可能性」の得点が高い児童が最も関係性攻撃を遂行している可能性が示された。

しかし、従来の攻撃性置換プログラムなどで対象にされていた児童は、孤立していたり、仲間から拒否されているなどの特徴を持つ者であった。孤立や仲間からの拒否という特徴は、本研究の結果を踏まえると、攻撃児全般の特徴というよりも、外顯的攻撃児の特徴と考えられる。つまり、従来の攻撃児の特徴の把握では、仲間から受け入れられている関係性攻撃児を見逃してしまう恐れがあると考えられる。そこで新たに関係性攻撃に対して許容的な認識を持っているかどうかという視点から児童の特徴を捉えることは非常に有意義であると考えられる。さらに、従来の攻撃性置換プログラムでは、友情形成スキルなどの社会的スキルの促進を対象としていたが、関係性攻撃児の場合は社会的スキルが優れている可能性がある。また、すでに仲間内での地位を持っており、関係性攻撃を有効な道具として認識している児童の場合、攻撃性を低減させるようなプログラムに参加する動機自体が非常に低くなる可能性も危惧される。そこで、介入のターゲットとして、関係性攻撃に対する「秘匿可能性」などの攻撃観を取り入れることで、関係性攻撃の低減につながることを期待される。そこで、今後はプログラムへの参加動機の低い児童をも巻き込み、関係性攻撃観の変容もターゲットに含めたプログラムの開発が必要となるだろう。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、児童の関係性攻撃に関する知識の個人差を捉える関係性攻撃観尺度を開発し、その有用性を示したが、いくつかの点で問題点も挙げられる。まず 1 点目として、未だ作成途中にある関係性攻撃観尺度が挙げられる。本研究では、関係性攻撃観尺度の十分な信頼性、妥当性を示すことができなかった。よって、本研究での結果を重視しながらも、今後はより個人差を反映し、信頼性・妥当性の確認の取れる尺度への改良が望まれる。また 2 点目の問題点として、本研究のデータの全ては自記式の質問紙によって得られたものであることが挙げられる。今後は教師評定により攻撃行動を測定するなどの工夫が求められるだろう。また、本研究では、海外のソシオメトリック法による社会的地位測定の代替として、自記式の Q-U を用いて自分が仲間からどの程度承認されていると感じているのかを測定した。現実的に日本でソシオメトリック法による測定は困難であると考えられるが、児童の仲間集団内での人気を直接測定したわけではない。そこで、今後は行動面から、クラス内地位の把握を可能にする尺度の開発が必要だろう。最後に、3 点目の問題点として、本研究の研究デザインは縦断的研究ではないため、本研究の結果から因果関係について言及することが不可能であることが挙げられる。今後は社会的情報処理モデルにおけるオンラインの情報処理変数を含めた、縦断的な研究デザインによる関係性攻撃観の検討が必要だろう。

引用文献

- Cialdini, R. B., Kallgren, C. A., & Reno, R. R. (1991). A focus theory of normative conduct. *Advances in Experimental Social Psychology*, **24**, 201-234.
- Cillessen, A. H. N., & Mayeux, L. (2004). From censure to reinforcement: Developmental changes in the association between aggression and social status. *Child Development*, **75**, 147-163.
- Cillessen, A. H. N., & Mayeux, L. (2007). Variations in the association between aggression and

- social status: Theoretical and empirical perspectives. In Hawley, P. H., Little, T. D., & Rodkin, P. C. (Ed.), *Aggression and adaptation: the bright side to bad behavior*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., pp. 135-156.
- Cohen, J., Cohen, P., West, S. G., & Aiken, L. S., (2003). *Applied multiple regression / correlation analysis for the behavioral sciences* third edition. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.
- Crick, N. R., Ostrov, J. M., & Werner, N. E. (2006). A longitudinal study of relational aggression, and children's social-psychological adjustment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **34**, 131-142.
- Dodge, K. A., Coie, J. D., Pettit, G. S., & Price, J. M., (1990). Peer status and aggression in boys' groups: Developmental and contextual analyses. *Child Development*, **61**, 1289-1309.
- 河村茂雄・田上不二夫 (1997). いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成. *カウンセリング研究*, **30**, 112-120.
- Rose, A. J., Swenson, L. P., & Waller, E. M. (2004). Overt and relational aggression and perceived popularity: Developmental differences in concurrent and prospective relations. *Developmental Psychology*, **40**, 378-387.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004). 小学生用 P-R 攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討. *心理学研究*, **75**, 254-261.
- 関口雄一 (2011). 児童における関係性攻撃の認識についての研究 (中間報告). *発達研究*, **25**, 201-206.
- Werner N. E., & Hill, L. G. (2010). Individual and peer group normative beliefs about relational aggression. *Child Development*, **81**, 826-836.

謝 辞

本研究を実施するにあたり多大なご指導・ご助言を賜りました, 筑波大学大学院人間総合科学研究科濱口佳和教授に心より感謝いたします。また, 調査の実施にご理解とご協力をいただきました小学校の児童の皆様, 教員の皆様に心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

